

【房総きのこ今昔】

成田市近郊、文学にみる明治～昭和初期の茸狩

吹春 公子

国の有形文化財に指定されていた大野屋旅館が、昨年11月解体された。成田山にほど近い木造3階建てには、鉄道唱歌で有名な、大和田建樹にゆかりある能舞台があった。20余年前に会食をしたが、館内観覧は団体のみと叶わなかった。老朽化とはいえ、まさかなくなるとは驚きであった。表参道の急坂を下ると左手に見えていた望楼とともに、もう見ることができないのは残念である。

その大和田建樹が、成田近郊で「初茸狩」をしたことを、『漫筆紀行 志たわらび』¹⁾に収めている。志たわらび(=下蔵)は、春先の下草のなかから頭をもたげるワラビをさす言葉で、漫筆を表すのに相応しく、装丁にもアールヌーヴォー調のワラビ枠が用いられている。紀行文であるが日付はなく、鈴虫や嚙虫が鳴き、木犀が風に香っていることをうかがい知るのみである。木犀はキンモクセイとおもわれ、秋のお彼岸ごろ咲き、いまでもきのこの発生する指標のひとつとなっている。

しかし没後、ご子息らによって出された『蘆船日記』²⁾の年表に、“明治三十四年九月、門人なる下総成田石井しげ子に招かれて茸狩りにゆく。”と書かれており、この初茸狩が行われたのは、明治34年とわかった。翌35年に『下わらび』を刊行、同年‘成田に瓢聲會成り毎月謡曲教へに行く事とす’とあり、36年には成田山の御本尊 不動明王の靈験を題材とした謡曲『碓引』を作詞している。たびたび滞在していた冒頭の大野屋では、これにちなんで能舞台を造設、舞台開きは明治42年6月20日と記録されている³⁾とのこと。

* 繰り返しはくの字点

さて、この初茸狩の行き先はというと、やはり“車で一里半”としか書かれていないのだが、三里塚にあった桜と茸狩の名所、宮内省下総御料牧場界限と察せられ、石井氏の住む成田町からなら、ちょうどそのくらいの距離にある。石井氏の知人宅に寄り合流、ナラタケの煮つけを出され、“しめじに似て味や、淡く。歯切れ極めてよし。”とあるが、とくにナラタケの千葉方言などは書かれていない。

この日は朝から雨。ハツタケの出が少し遅れているとのことだが、大和田建樹は、“あさりあさり*て五つ六つは取りたり。”全員では、“大きな箕と。大廣蓋を満たすだけの敷なりき。”と、それなりに採れた様子が書いてある。御料牧場が初茸狩の好適地であったのは、手入れの行き届いた、若齢のマツ林がそこにあったからである。

『下総御料牧場史』⁴⁾によれば、江戸時代は幕府直轄の広大な野馬の放牧場(佐倉牧)があったところで、野馬の寒暑をしのぐために、被陰林としてマツ、スギ、クヌギなどの苗木が植えられ、佐倉周辺の山林から切り出されたクヌギは焼いて木炭とし、佐倉藩が売却にあたり江戸に輸送されていた。佐倉牧は油田牧・矢作牧・取香牧・内野牧・高野牧・柳沢牧・小間子牧の7つあり(内野牧・高野牧・柳沢牧は、のち佐倉藩に移管)、三里塚はそのうちの取香牧にあたる。

明治となり、新政府によって馬は取香牧と小間子牧に集められた。幕府の崩壊により困窮する多くの元武士などの救済のため、佐倉牧は取香牧を除き開墾会社に譲渡され、移住

と開墾が行われた。取香牧には、明治8年に下総羊牧場と取香種畜場がつくられ、明治13年に合併して下総種畜場となり、総面積は4,229町歩(三里塚区は1,327町歩)。政府による所管の変更や調整により、明治18年には総面積3,517町5反となり、明治21年に改称され宮内省下総御料牧場*となった。

では、どのくらいの樹木、そしてマツがあったのか。同書には、“もともとこの地方は一望千里の草原であり、樹木は極めて少なかったので、開墾以来毎年防風用・風致用あるいは日蔭用として数多くの樹木が植えられた”とあり、植栽の記録もあったので、主要なものを抜き出してみた(掲載のなかった部分は、当時の要覧⁵⁾、沿革誌⁶⁾、事業報告⁷⁾などを参考にし、本数は百の位を四捨五入した)。

- 明治9～18年までは、104万3千本を植樹。
マツ68万7千本、スギ10万1千本、クヌギ22万8千本、サクラ5千本。
- 明治19～21年は、51万3千本を植林。マツ6万5千本、スギ2万4千本、クヌギ20万1千本。サクラはなく、ムクゲ22万本。
- 明治22～26年は、96万5千本を植樹。マツ51万本、スギ27万5千本、クヌギ10万2千本、サクラ3千本。防風林、各種用材利用のほか牧場の風致を増した。
- 明治27～31年は、49万7千本を植樹。31年末にはマツ129万1千本、クヌギ86万9千本、スギ39万3千本、ヒノキ1万8千本、サクラ1万7千本。709町4反歩に植林され、牧場面積の5分の1、約260万本に達した。
- 明治32～36年には、放牧地周辺約300町歩の傾斜地216町歩にマツ、スギ、クヌギ77万8千本、サクラ5千本を植樹。明治36年5月には、マツ177万9千本、スギ52万9千本、クヌギ100万5千本、サクラ2万2千本となった。

* 大正11年の御料牧場制度廃止に伴い宮内省下総牧場、昭和17年に宮内省下総御料牧場と改称している。

- 明治37～44年は、資料に乏しく不明とあるが、日露戦争役後大正を迎えるまでの期間にはとくに記載する大きな変化はなかったと思われる、と書かれている。
- 大正2年、樹林面積が約600町歩に達し、マツ159万9千本、スギ32万本、クヌギ41万3千本、ヒノキは6千本でマツと混淆。植林本旨の防風と木材、薪炭の供給を達し、以後は樹木の整理を主とする。

マツ・スギ・クヌギの苗は3年物、ヒノキは4年物を用い、植樹密度は1反(300坪)あたりマツ450本、スギ・ヒノキ混淆は300乃至450本、スギ純林は600本、クヌギ300本。

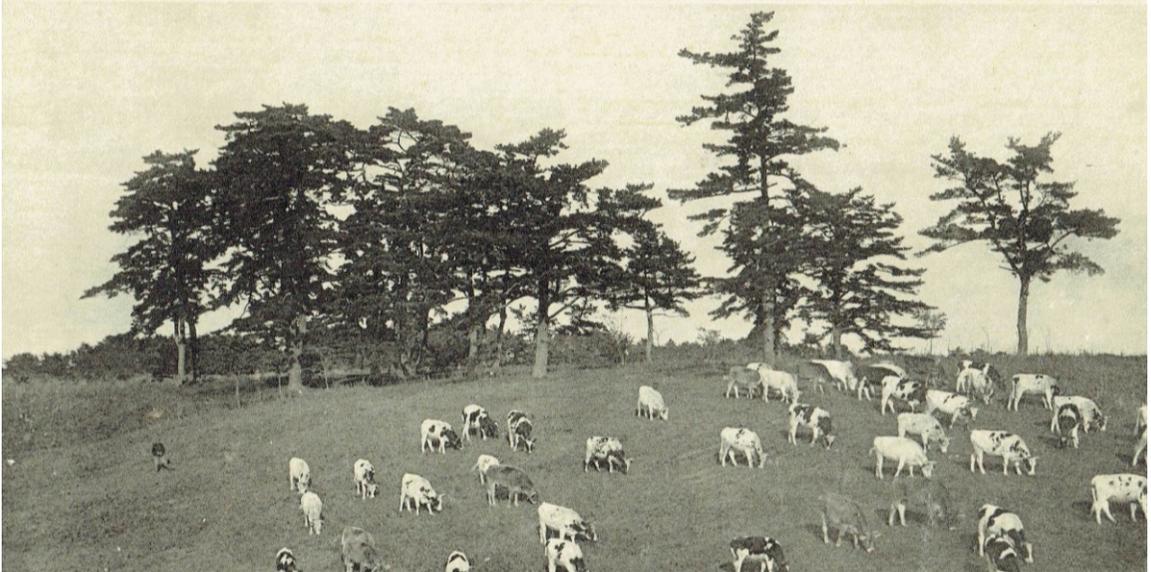
これまでクロマツを植えていたが、虫害が激しく、甚だしいものを伐採、のちスギを混植したり、新地にはアカマツを用いることにしたとあり、サクラも、鑑賞木としてソメイヨシノを植えていたが、天狗巣病になりやすく、ヤマザクラに変更した。

- 昭和10年、明治・大正に引き続き、薪炭、用材、防風のため、周囲の耕地や放牧に不適當な土地に植林。マツ136町02反、スギ8町24反、クヌギ91町51反、マツ・スギ139町66反、マツ・スギ・ヒノキ混植20町39反、計395町85反。

(以後省略)

大和田建樹が初茸狩をしたのは明治34年であるので、およそ150万本もの巨大なマツ林は、植林直後を除けば樹齢10～40年ほどで、ハツタケの発生にはよい状況であったようである。特筆すべきは、そのマツ林は、2坪(4畳)に3本が植えられた計算になる、クロマツの密林であったということである(ある程度成長後は、間引く等して調整をする)。

クロマツは幹が黒く、葉は密につき、海岸に生える。潮風に強く成長も早いことから、現在でも防風・防砂林として利用されている。アカマツは幹が赤茶色で、葉はクロマツより



『下總御料牧場之光景 子持澤』大正時代の絵葉書（部分）

上：高密度に植えられた防風林。大正2年まではクロマツを植栽していたという。下：被影林（日蔭林）として、江戸時代に植えられたクロマツ。左の人物からすれば相当に太く、樹齢100年を超えるものもあった。

も疎で、内陸の尾根筋など山地に多い。現在の北総でみられるアカマツ-コナラ林は、里山として人々に利用された二次林である。

クロマツが選ばれた理由は、関東大震災後の大正12年に遠山村***へ移住した木村壮太が、著書『農に生きる』⁸⁾「開墾地にきて」（1930年9月）のなかで、“この地の風と来た日には、不毛の荒野を切り開いてからまだ

間がなく、防風が不十分な上、土地が痩せてみて、砂質土が多いところからそのひどさは想像上である。”と書いているように、空っ風吹きすさぶこの地においてこれを防ぐには、葉が多いクロマツでなければならず、燃料にする松葉もたくさん採れるため、かねてよりクロマツが有用とされてきたのである。サクラについても、“今、名高いこの地の櫻も、植えた当初の目的は、色々植ゑて見た木の中で

*** 転居を重ね1931年遠山村仲土手（久米野）に落ち着く。



上:『宮内省下總牧場馬の放牧』、大正時代の絵葉書(部分)
見渡す限りの平原は江戸時代とほぼ変わらぬ光景。

下:『三里塚の櫻(試験花)』大正時代の絵葉書(部分)
植えられているのはソメイヨシノ。奥にはクロマツの防風林がみえる。

も櫻が地味に適して、成長が早く、防風林として、一番よかつたからだ」と云はれてゐる。”と書かれている。開墾した当初は、とにかく、一に防風であり、花は二の次だったのである。

御料牧場の林へは誰でも立ち入れ、秋には近隣の人々が心待ちにしていた。とくにハツタケは乳液が青緑色に変わることから食毒の見分けがつきやすく、人気が高かった。娯

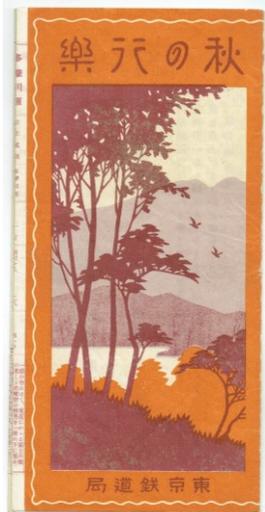
楽の少ない時代、都会から鉄道に乗っての初茸狩遠征は、一大レジャーでもあったようだ。

しかし、同書の「田園雑信」(1929年11月)では、その初茸狩について、“この頃、秋には京成電車あたりの宣傳で、この付近の三里塚邊の初茸狩にと云って、東京あたりから来る人達も大分見受けるやうになつたが、來ても初茸なんぞは誰にも採れはしない。何しろ朝三時か四時から、處の者が出て行つて採つ

てしまふのである。さうなると、もう楽しみ處ではない。専門的な職業だ。多い日は、日に一貫匁内外もさへ採って来る。”と書いている。

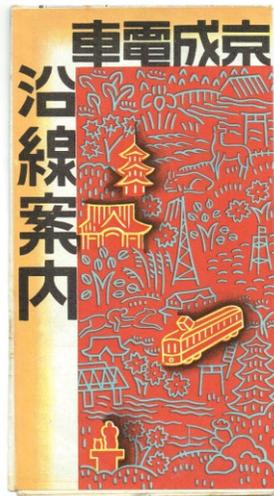
一貫とは3.75kgである。ハツタケの重さを量ったことはないが、ほぼ同大のシイタケが20gほどなので、計算すると444.5個、大小含めればおよそ500個ほどとなり、ちょうど背負いかごが一杯になるくらいとおもわれる。

このようなハツタケは、成田の町で売られたり、冬ごもりの食糧として貯蔵する旨を、後述する水野葉舟が書いているが、木村壯太は、同書「馬追ひ場の跡にて」（1931年7月）では、“殆ど足を使はずに、二時間以内で東京市内へ、遅く晩方になつてまで行けるやうになつた。この頃では、朝私の處の鶏舎で鶏が産んだ卵も、夕方には東京市内の何處かの市場の店頭にも並んで置かれている筈である。”と、家の前の法華塚駅から成田鉄道によって、誰かに託した卵が東京へ出荷されている様子を書いている。卵組合の集荷とおもわれるが、野菜を売りにゆく行商人を介したのかもしれない。季節にはこのように東京へハツタケも運ばれたとおもわれる。たくさん採れたからといって、毎日大量に食べられるものではない。きのこの発生時期は短く傷みも早い。とくにハツタケは傷つくと変色する。そこでそれらを持たない需要があるところへ行つて売る。ハツタケはお金になったのだ。



東京鉄道局の沿線案内『秋の行楽』（該当部分を抜き出し）、上と右の右側：昭和4年 下と右の左側：昭和5年 茸狩の場所は、三里塚駅附近一帯と漠然としているが、駅は牧場の敷地内にあった。

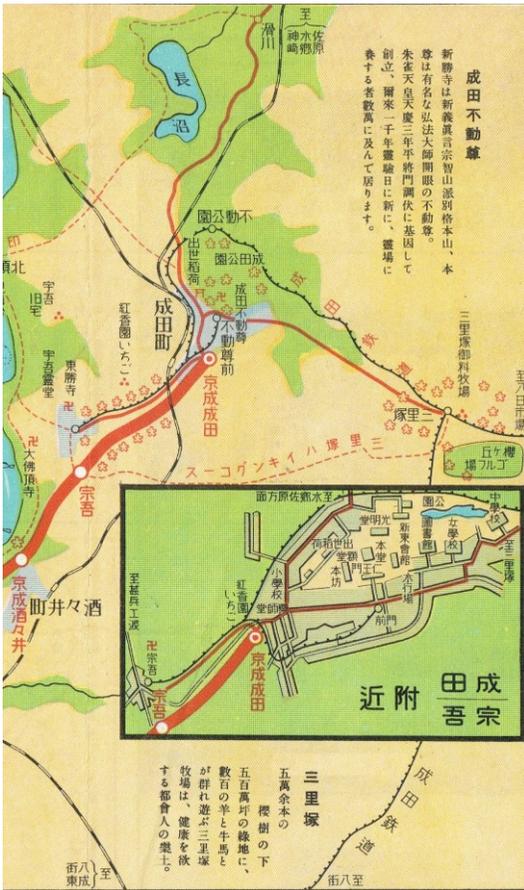
三 里 塚 成田鐵道三里塚驛附近一帯	三 里 塚 成田鐵道三里塚驛附近一帯	茸狩の好適地
初 茸 中月上旬より	初 茸 中月上旬より	運輸機関 最寄驛 譯よりの距離 乗物の有無及料金 茸の種類 時期
兩國橋から 一四三三號	兩國橋から 一四三三號	三等片道運賃



京成電気軌道の沿線案内『京成電車沿線案内』（該当部分を抜き出し）昭和13年 同じ意匠の表紙で、大きさや色、掲載内容のレイアウトが異なるものが複数年あるが、三里塚の初茸狩案内が明記されているのは大判で、各種案内もより充実している。



大量に採れるハツタケは貴重な食糧で、冬の貯えにもなった。そこで随時食べられる保存食の出番となる。水野葉舟が下総高原の食物について聞き取りした記録⁹⁾には、“貯蔵するもの——以前はよくかちぐり、乾初茸、乾わらび（これらのものは話し手の青年時代までは、とつても採りきれない程あったので、それをほして貯蔵した。）”とあり、乾燥して保存されていたことがわかる。また、“茸——この地方で食べられるのは、初茸とつるだけの二種に限られていたようである。他にも幾種類か食べられるのがあるが、この地方の人は食べない。”とも記録されている。



左頁『京成電車の沿線案内』の地図（部分）
三三塚御料牧場と三三塚駅には、桜の表示（☆）はあるが、
凡例にある茸狩りの表示（🍄）はつけられていない。場所柄、
可視化するには俗すぎるからだろうか。

その水野葉舟は、大正13年に遠山村駒井野へ移住した。著書『村の無名氏』¹⁰⁾の小品「山かせぎの人たち」（1934年4月）には、やはり開墾地での生活が詳細に書かれ、秋冬のマツ林を舞台にショウロ、ハツタケ、ブクリョウについての話も登場する。序に、“少し小説風にした作品です。従つて事実を書いたものではありません。”と但し書きがあるものの事実が下地になっていることに変わりない。

“「わかかね？ わしは松露を採りに来ただよ。この山には松露がいくらでも出るだから旦那も捜してみるといふだ。」と、山で出会ったおやぢに教えてもらって松露を採る。 “後で聞いて、そのおやぢは、ここらの山からさういふ獲物を集めて、成田の町へ賣りに行く一人であった事を知つた。この土地で「山」とよばれてゐる林の領域がまだかなり広い。畑の少ない人たちがその林の中にはいつて、そこで季節季節のいろいろのものを採り、それでもつていくらかのみりを稼いでゐる。”それを、山かせぎというさうである。

別の日、“秋日よりの、上せるやうな午頃に、穂の小さい鎌と杖とを持つた茸採りが、からだちゆうにぬすびとはぎの實をつけて、汗ばんだ顔をしながらやつて来て水を飲ませてくれといふ事がある。”“茸がとれたかといつて聞くと、「いつかう採れねえね。朝うすつ暗れえうちから山を歩いてやつとこんな位しか採れねえです。」定りのやうにかういつて、そのあとでどうかすると、その茸を買はないかといひ出す事もある。その人たちはちやんと小さい秤まで用意して持つて居て、細かな注意で目方をはかつて賣る。多分その日山で採つたえものを、その足で近くの町に持つて行つて金に代えて家に歸る用意をして来たのであらう。”と、先述の木村壮太のいう専門的な職業（＝山かせぎ）において、採集したきのこ類をどう捌いたのかが書かれている。ここでの茸はハツタケであると思

われる。関西圏で茸といえばマツタケをさすように、北総で茸といったらハツタケである。

また、“冬の初めから春にかけての時分には山いも堀と山百合掘りとが山を歩いてゐる。” そうで、あるとき井戸に出てきた男は、“三尺もあらうと思われる細い鋭い三角の槍の穂に、樫木の柄のついた道具を持つてゐた。何に使ふのかと聞くと茯苓をつく槍だといった。かういふ人たちが、草が茂つてしまつて毒蟲の出てる季節だけをよけて、「山」の中を歩きまはつてゐる。”と、薬用のブクリョウも採れたことも書かれている****。

しかしそのブクリョウも、11年後の昭和15年の『文藝文化』¹¹⁾「村とその周囲の自然」では、“今では茯苓つきの姿もめつたに見なくなつた。長い鋭い三角の針の頭に、しもくの柄をつけたのを、小掖に抱へこんで山にはいりこんで来る人が、この邊には用が無くなつたのである。といふのは茯苓の出来る松の古い伐株がある場所が、もうここらには殆どない。さういふ場所を残しておくどころか、林を伐るなり、すぐおこして畑にしてしまふ。そこで茯苓の育つ場所が以前のやうにこの邊ではなくなつたといふわけである。”と、近隣の山が切り開かれて畑になつていったことで貴重な動植物が姿を消したり、近場で燃料がとれなくなつたりしたことが書かれている。

“山は浅くなつたし、見つけてたちまちのうちになく歩く人の心かたがつて来てゐるから、見残しが一年一年少なくなつてしまふのは仕方がない。” “悠長なやうでも、茯苓つきでも、イモ堀、百合掘りはとにかく商賣になる仕事だ。”と書かれたその人たちは転職を余儀なくされたことだろう。“その百合掘りを、近身めつたに見かけなくなつてしまつた。それと反比例して、近年一年まじに盛んになつて来たのは、炭焼きである。”

御料牧場周辺に新しい村ができ、急に人の多くなつた開墾地では、それまであつた古い

村も林が切り開かれて、とにかく生きるために食料を、お金のためには仕事を手に入れることのほうが、環境や景観よりも先であつたのである。ここで専門職の採るハツタケについて触れられていないのは、まだそれなりに採れてたということであり、ハツタケが菌類であるために、植物の塊茎や球根、むかごや種子と異なり、目には見えない胞子で風に乗って広がり、浅くなった山でも、松葉や落枝の取り除かれた林床に芽生えたマツの実生や、皆伐・抜根されて畑となつたところでも、その周辺や家の風除けとして植えられたマツの茂みに、巧みに移動できたからではないだろうか。そもそも植えているマツの苗木は、山採りの実生もしくは近隣の圃場で種子から栽培されたもので、すでに外生菌根菌であるハツタケがこっそり感染していることを考えれば、植林地のハツタケは、知らず知らずのうちに人が栽培・発生させていることになるのではないだろうか。

『下総開墾』¹²⁾の「木の葉が黄ばむ」では、“この下総の高原の林は、この四、五年来一層むやみに伐り払われて行く。(中略)今、秋になつて東京の出口、殊に東北方面の出口、それから東京の外側を取りまいてる電車の停車場に仰山らしくはり出されている初茸狩りのポスターの中に、三里塚も交じっている。私はひよつと東京に出たついでにそれを見ると、東京という都会の真近い周囲に、山の恵みの乏しさを感じて、それを平原のなかにある都会のせいだと思う。それから一つは、日本人が天然を大切にすだけの文明の、も一歩手前にいる田舎者のせいだと、つくづく考える。えものがあれば、すぐ我れ勝ちにとって、そこらを踏み荒らしてしまふ。無作法さを感じるのである。実際、下総の高原も、その「踏み荒らし」のために実に、天然が乏しくなつてしまつた。昔はこの高原に初茸は勿論、非常に豊富であつたらうし、しめじもあつたらう。” “それで今では、哀れな怠民の部落

**** 『下総開墾』¹²⁾に、この出来事が1929(昭和4)年であることが書かれている。

三里塚の秋の人寄せに、無理に誇張したポスターと、土地の人が我れ勝ちに山をもぐって採る初茸が貧しい唯一の、この土地の食べられる茸である。だが、ここにももっといろいろの食べられる茸がある。”といい‘ささたけ（武蔵野でささご）’＝ナラタケモドキ、クリタケ、ホウキタケ、ショウロ、キクラゲ、ナラタケ、エノキなどの名を挙げ、土地の人は念頭に置いていないと述べている。

急速に進む開発と乱獲により、これまであった自然と人間の調和が崩れてしまったこと、もともと多様性があるのだから、他にも食用となるものがあり、しっかりと見分ける力を身につければ、もっと生活が豊かになるにもかかわらず、単一の茸＝ハツタケしか採らないことの貧しさ、環境条件が以前よりも悪く、それほど採れないにもかかわらず、鉄道会社は乗車率を上げるためのキャンペーンをおこなない、現地では自然との付き合い方を知らないマナーのない採集で、都会の人々が押し寄せる前に無償で入手できお金になるハツタケを我先にと根こそぎ採ってあたりを踏み荒らし、貴重な生き物がいなくなることを嘆いている。だが、入植によってこれまで自然を知らなかった都会の人々や別の地方から来た人々が、食うや食わずの生活のなか手っ取り早く野山で食料を集めるとき、また、生活のためにそれらを売って金銭を得ようとするとき、古くから安全に食べられていて、大人も子供も売り手も買い手も、唯一確実に見分けられるのがハツタケで、昔からほかは食べないため、それが伝わっているだけなのではないだろうか。食料確保を兼ねてのレジャーではわかりやすさが求められるが、初心者が一番わかりやすいのもハツタケである。

同じマツ林で採れるにもかかわらず松露狩というキャンペーンがないのは、ショウロは秋から春先の冬場に発生するため、燃料をとる折の松葉搔きによって、住民に毎日確実に

獲得されてしまうこと、また中が白く未熟なもののみを集めるのは難しく、日照の短い日にわざわざ電車賃を払ってまで出かけるのは割に合わないためではないかとおもう。そしてなによりも茸狩はきのこ形をしたものを採るほうが、満足度が高いのだとおもう。

ところで、“無理に誇張したポスター”とはどのようなものだったのか。だが、鉄道専門の博物館でも所蔵がなく、確認することはできなかった。誇張とは大袈裟に表現することなので、現場の景観を美化し、少ししか採れなくてもたくさん採れる、採れないところでも採れる、などと表現しているのだろう。

それなら、と思いついたのが、成田町にある鉄道省指定旅館組合が昭和9年に作成した観光案内で、成田山公園で茸狩ができると紹介されたものだ。旅館組合は、蓬萊閣ホテル・扇屋旅館・竹田屋旅館・梅屋旅館、大和田建樹にゆかりのある大野屋旅館も名を連ねており、いずれも表参道界隈にあった大きな旅館である（現在はすべて廃業）。公園は大正9年に着工、もともとあったマツやスギの古木を生かしながら昭和3年に竣工、完成までに8年を要した大規模な庭園である。公園でもマツを植えれば、ハツタケはそれなりに生えるであろうが、なによりも本山の庭園であり、大勢の参拝客がおしかけて茸狩をすることはいささか困難ではないだろうか。当時の案内や絵葉書などをみると、それほど植栽のマツ林は見られず、一部は植栽に入らぬよう竹の仕切りがあったりと、あくまでも庭園で、自然の山林の部分でも、なかに分け入って茸狩りをするなどできなかったのではないだろうか。ほかにも同様の紹介をしているものがあるかと、少ないながら当時の案内書を見てみたが、成田山公園内で茸狩ができると紹介しているものはこれだけで、組合に名を連ねている蓬萊閣ホテルの5年前の案内には、茸狩の表記はなかった。



『成田名所案内』、鉄道省指定旅館組合、昭和9年成田山の境内案内には、成田山公園で“秋は茸狩”とあるが、どれだけの量が採れたのか疑問が残る。三里塚は成田町ではなく遠山村であるためか、桜の名所として地図にその位置を示すのみである。(該当部分を抜き出し)

『霊境成田』、蓬萊閣ホテル、昭和4年“完成の新公園”の見出しで竣工を伝えるが、公園での茸狩り案内はない。“成田を環る霊場勝跡”のひとつに“三里塚牧場附近の櫻と初茸”の紹介がある。(該当部分を抜き出し、公園の説明省略)

三、三里塚牧場附近の櫻と初茸 印旛郡遠山村の御料牧場三里塚は、むしろ櫻の名所として漸く響いて行くやうです。二十四番の風吹き盡して空も長閑に霞む頃は、自動車の客、自轉車の主、まうして引き續く徒歩の人が成田三里塚間の街道を埋めます。日がうちまゝに花を照して、白きは白く、紅きは紅く、男に、女に、大人に、子供に、落花と胡蝶と舞れ舞れ獨りて亂舞するところ、天下の春は三里塚に集つたかの觀があります。況んや無数の若駒が花下芳草を馳驅する様は活動寫眞そのまゝです。なほ秋涼散策の候となれば、この邊一帶初茸狩の好適地として響しく都人を引きつけます。

池 御 園 公

狩、紅葉狩に、冬は雪の百景亦面白く、日本のお三公園に比し優ることも劣る處なきを保せん。

園 公 山 田 成

雄瀧は鹽原の雄飛之瀧を擬し、公園入口左の鬱林中に懸り、直下十數丈雄瀧は其左右圍ひの區畫に數條懸り、信者の水浴に任ずこの前面には壯麗なる白木造りの脱衣殿(洗心室)があり、この前を塗々と流る、瀧の餘水は第一、二、三の池と順次潤して幾千萬の群魚を喜ばし、鱒を傳ふ松籟に名禽は嬉々ぞ和す。又春は探梅、觀櫻に、夏は納涼、觀月に、秋は茸狩、觀月に、秋は茸園といふも過褒ではなく日本の三公園に比し優ることも劣る處なきを保せん。

成田山公園 昭和三年、十ヶ年の日子と數十万の巨費を投じて完成せる大公園にして光明堂の右方に正面を有し、全面積四萬餘坪、丘陵自ら起伏せる大自然の妙境を利し、數千年來の老杉、古松の雅味を活かしこれに四阿を加へ亭を点じ花園を配し、寄岩珍石を積み更に多額の淨財を得て瀑布を設けたるは正に錦上添花ふるものと云ふべく、雌雄二瀑ありて

五萬坪の新公園

このあらかたな靈場に、今度五萬坪の新公園が築造完成され、開園式を行ふたのはツイ昨年の秋でありました。舊公園は成田山に隣接せる丘陵で、東西に蜿蜒し喬松老杉鬱然として天を衝き、田園細流脚下より展開して自然の風景物す可く、新公園は舊公園に接地して築造され、十年の星霜と數十万の財とを費して漸く完備の域に達したもので、布石結構、林泉の妙、眼目の佳、これを高松の栗林、金澤の兼六、岡山の後樂等所謂日本三公園と比較するも敢て遜色を認めない、その道のの人々から折紙をつけられてをります。殊に園の隅に異彩を放つ齋藤末吉氏寄進の瀑布の如きは、絶を野州鹽原の奥地なる雄雌瀧に採り、幽韻神邃真に俗塵を絶つ思があります。

(林 密 園 公)

近郊案内

▲三里塚牧場 帝室御領牧場にして櫻花の名所 軌道車バスの便があり又秋の茸狩にハイキングに賑ふ所

一大靈園としての成田公園

十年の歲月と幾十萬の財とに依つて昭和三年完成された大公園でありました。その全面積約四萬坪齋松老杉天をつく幽韻神邃な中に男瀧女瀧の雄飛してゐるあたり、正に一大仙境であります。

池畔をめぐれば春の櫻、夏の青風、秋の紅葉、冬の寒梅、皆それ々の趣きがあり、其の優美閑雅なる四季の遊覽に適し而も廣大な芝生は慰安會、園遊會等の催しに最も好適な地であります。

『霊境成田』成田町、昭和4年公園での茸狩り案内はなく、三里塚へ誘う案内もない。三里塚は遠山村なので、範囲を成田町にしぼったのかもしれない。(該当部分を抜き出し)

『霊境成田』成田山參光協会(のち観光協会)、昭和12年成田山公園での茸狩の案内はなく、近郊案内の三里塚牧場は、“茸狩にハイキングに賑ふ所”となっている。(該当部分を抜き出し)

この案内書と同じ昭和9年発行の鉄道省の旅行案内書¹³⁾や公園ができて間もない頃の昭和5年発行の旅行案内書¹⁴⁾の成田や成田不動尊の項には、新しくできた公園についてはなにも書かれていないが、後者の半日の行楽の該当項には、“(本坊には) 宣伝班といふのがあって” “年中繁栄策に脳味噌をしぼつてゐる” ことや、“町全體が此の不動様のために生きている様な處で” “門前町として一寸他に類のない豪勢振である” とあることから、この組合も、町の集客になるのならよかれ、と大袈裟な案内を作成したのかもしれない。おそらく、ハツタケは採れたのだ。話を大きくしただけなのだ。もし水野葉舟が“無理に誇張した”と記さなかったら、変だなと思いつつも、この案内を事実と信じてしまっただろう。

ちなみにこの旅行案内書には、一日の行楽も紹介されているが、三里塚は出てこない。わざわざ動物の放牧場を見に行くというのがトレンドではなかったのかもしれないが、一日では足りない、もしくは常に行くところではなく、花見や初茸狩のイベントに仕立てられて行く、そんな場所だったのかもしれない。

その後も御料牧場の防風林は継続して管理され、かつて虫害^{****}がひどく、植え替えられたアカマツの林も昭和初期には20~30年生となつて、それなりにハツタケやショウロが発生したことだろう。植えた苗木さえ飛ばされるような開墾地で、風を除け土を留めるためには、荒野に先駆し、やせた土地でも育つクロマツ・アカマツともに最適で、マツの外生菌根菌であるハツタケやショウロが、関東ローム層の貧栄養な大地にそれらを活性化し根付かせてきたのである。外生菌根菌が感染した苗木は成長も早いことが知られる。牧場にはならなかったほかの牧でも、土地を拓き、畑や宅地の風除けにマツを植えたところには同様の展開がみられたことだろう。

手入れの行き届いたマツ林というのは、いわゆるガーデニングのような手入れではなく、

**** 『三里塚散歩』¹⁵⁾ に収録の「隣人」に、別箇所ではあるものの“天牛が卵をうみつけ、その卵がかへって虫が幹の中に喰い入った”とあり、マツノザイセンチュウによる被害とおもわれる。天牛はカミキリムシ。

常に近隣の住人が燃料や肥料など生活のために林内から落葉落枝を必要に応じて取り除いていた、いわば人が依存し寄り添っていた林であり、マツ林だけでなく、その他の樹林も同様だったことだろう。牧の開発とマツとハツタケは切っても切れない関係で、ハツタケはむしろ人が育てていたといってもよいだろう。北総台地の約半分が牧であったことをおもえば、千葉、とくに北総の人々がハツタケを好み、愛するわけがここにあるように思う。

参考・引用文献

- 1) 『漫筆紀行 志たわらび』大和田建樹、金港堂書籍、明治35(1902)年
- 2) 『蘆船日記』、大和田りょう、明治43(1910)年
- 3) 『広報なりた』、No.1029、成田市、平成16(2004)年6月15日号
- 4) 『下総御料牧場史』、宮内庁、昭和49(1974)年
- 5) 『下総御料牧場要覧』、下総御料牧場、明治36(1903)年
- 6) 『下総御料牧場沿革誌』、下総御料牧場、明治27(1894)年
- 7) 『下総御料牧場第三期事業報告』、下総御料牧場、明治37(1904)年
- 8) 『農に生きる』、木村壯太、暁書院、昭和8(1933)年
- 9) 『下総開墾』、水野葉舟、葉舟会、昭和63(1988)年。
※「下総開墾の見聞」は『郷土研究』、郷土研究社、昭和6(1931)―8(1933)年の再収録。
- 10) 小品集『村の無名氏』、水野葉舟、人文書院、昭和11(1936)年
- 11) 『文藝文化』3巻3号・4号、日本文学の會、昭和15(1940)年 ※『三里塚散歩』、水野葉舟、葉舟会、昭和60(1985)年に再収録がある。
- 12) 『下総開墾』、水野葉舟、葉舟会、昭和63(1988)年。
※「木の葉が黄ばむ」は『国民文学』国民文学社、昭和6(1931)年の再収録。
- 13) 『房総と水郷』、鐵道省、昭和9(1934)年
- 14) 『東京近郊日がへりの行楽』、松川二郎、誠文堂、昭和5(1930)年
- 15) 『三里塚散歩』、水野葉舟、葉舟会、昭和60(1985)年